

# 自己の根元と自己との対話

——願生論（十四）——

安 田 理 深

—

前学期は自覚ということ、そういうような問題を中心に考えてきました。願生と言いましたところの自覚の問題としてですね。それで、二、三回前から、後の学期のテーマとして、言葉というものを中心に考えていきたいと思うのです。何回も繰り返して申しましたように、もちろん自覚というものは、意識ということがなければ成立しない。自らが自らを意識するというような、意識することがなければ成立しない。無論、物質の上には自覚ということは、自ずから、意識がなければ自覚は成立しない。けれども、その意識そのものが自覚という意義を持つ。ご承知のように、ことに唯識の教学で未生と言う。唯識ととっても、これは無着や世親の唯識では、そういうことは十分はつきりしていませんけれども、それを承けた護法という人がいるわけです。因明という論理学を改革した陳那という人がいますが、この陳那の伝統というものを承けたのが護法です。その護法の教学で自証ということを言う。意識作用というものの本質について、自証ということ言うのです。旧い無着や世親の唯識では、見分・相分と言う。見分・相分

二分と言いますかね、見分と相分ということで意識というものを考える。「見」はノエシス (Noesis [独])、それから「相」はノエマ (Noema [独])。

意識というものは、何かの意識です。意識するというのは、何かがあつてそれを意識するのではない。はじめから何かの意識なのです。何にもないものを意識するということはないのであつて、「何にもないもの」と言えば、その「何にもない」というものが意識の内容になるわけです。意識というものは、はじめから何かについての意識である。そういうことが意識の本質です。意識というものは、意識を離れたものを意識するということはできない。「意識を離れたもの」というのは、それは後で考えるのです。考えてそう言うのであつて、意識は意識の内容を意識する。これはもう疑うことのできないものです。否定することのできない一つの事実です。他に証明を求める必要がない。それ自身において証明されている。意識というものが、もう意識内容を意識している。ということは、他から論証される必要がない。それ自身、真理を証明しているという意義があるわけです。そういうわけですね、意識の本質というものは、何かについての意識ということを構造的に表せば、意識というものは見分・相分という構造ですね。相分というのはノエマであつて、意識内容です。これはどういうことを意味しているかというところ、意識は意識を超えたものを対象にするのではなしに、意識の内容を対象としている。意識内容を意識する。意識する側、作用の側はノエシスですね。内容の側はノエマ。こういうわけです。ノエマ・ノエシス的な構造というのが意識の本質でしょう。こういうように考えているのが無着や世親の唯識の考えになりますね。結局こういうところから意識というものを考える時に、思考作用ということになれば、意識される何かと、何かについての意識ということは一つである。そういう点が物質というものと区別される意識の本質ですね。

ところが、この意識は、何かを意識するのではない。意識するということ意識する。そういうのを自証と言うのです。意識するということは、何かについて意識すると言うが、何かを意識するのではない。何かを意識するとい

う作用を意識する。それを自証分と言うのです。こういう考えを出してきたのが護法の教学です。これは無着や世親にはちよつと見えないですけども、自証というのは自らが自らを証するという意味で、直接に知ることを「証」というのです。『教行信証』の証ですね。推論しているのではない。そういうことになると、意識の本質は自証作用ということになる。自証ということは、自己が自己を知るというわけで、意識そのものが、もうすでに自覚という意義を持つているのです。こういうように、自覚ということは、やはり意識というものがなくしては成り立たない。

しかし、そういうものを一般的に言おうすると、こういうことが言えると思うのです。何遍も言うていきますけれども、意識というものは、ただ「知る」ということだけではなしに、「目覚める」ということがある。エアヴァツヒエン (Erwachen [独]) ということがある。そういう点が、考えなければならぬところですね。眠っているものが目覚めるということ。ただ知るということには違いありませんけど、目覚めるということが大事だ。それは仏教の言葉を使えばボディ (bodhi [梵]) という意味です。自覚の「覚」には、無論「知る」ということ、「覚知する」という意味もあるけれども、「覚悟する」と言うのですから、覚悟すると、後を絶った形で「悟る」わけですね。それは一つの目覚めでしよう。ですから、自己に目覚めるということは、やはり自覚という意義がなければなりません。自己を失っていたものが、自己を回復してくるというような、本来の自己というものを見出ししてくる。その本来の自己を意識の上に反映させるのです。覆われていたもの、それを意識の上に反映させてくる。そういうことがなければならぬですね。

自覚というものは、識ということがなければならぬけれども、その識は、目覚めた識という意味です。本来の自己、本来の真理に目覚めたというような意味での識、仏教はそれを「智」という言葉で表しましたわね。それはある意味の認知です。認識という意義を持つていてしょう。その認識は意識がなければ成り立たないですね。意識ということがやはり前提となっているでしょう。意識というものが、さらに智としてある。あるいは智となった識という

意味ですね。そういうような意味で、「目覚め」ということが言えると思うのですね。まあ、信仰というものを考えれば、やはり信仰認識でしょう。それは一つの目覚めた識ということです。信仰という意識も意識のだけれども、信仰意識というものは、信仰的認識というものは、目覚めた意識という意義を持たなければならぬ。本来の自己というものを覆っていたものを破って、そして本来のものを現してくる。こういうふうには、隠されていたものが顕わになる。意識の上に顕わになるわけですね。そういう意味で、自覚ということは、やはりエヴァアツヒエンというような意義を持たなければならぬ。そういうようなことは前に繰り返し考えてみたところです。

人間というものは、自己を知るということ、これが人間の最も重要な意義でしょう。自己を問い、また自己を見出し、そして見出した自己をもって生きる。自己をもって生きるというような、そういうところに人間存在というものの勝れた意義というものがある。そういうことを、だいたい前学期の主題としてお話ししてきました。「自覚」ということでもいいですけれども、まあ、「目覚め」と言ったほうがいいね。エヴァアツヒエンということが、前学期の  
だいたいのテーマです。

## 二

そして二、三回前の講義から問題が移ってきて、第二番目には「言葉」ということが、これからの主題になると思います。どこまで話ができるかわからないけれども、言葉ということを考えていきたいと思えます。ダス ヴォルト (das Wort [独]) へもいいますけれども、ワード (word [英]) です。広くスピーク (speak [英]) と言いますか、シュプレッヒエン (Sprechen [独]) という問題。そういうことを第二の講義の主題にしていきたいと思うのです。

だいたい人間の根底というものの自覚は、願、信、信仰認識ですけれども、願生道においては根底は願という。本

願の「本」という字は、グルント (Grund [独]) という意義を持つている。「本の願」と言うより、「願が本」なものでしょう。そこで、問題はその願というものが一つの言葉とかたちをとってくる場合ですね。『無量寿経』の願について、非常に大きな意義を持つているのは、「名」というものがあるということです。本願というものに名というものがある。名は一つの言葉です。名言という言葉がありますが、名言という言葉は名を表している。これはやはり言葉ですわね。本願というものは、やはり「本」ですから、やはりグルントという意味を持つているですね。グルントヴォレン (Grundwollen [独])。本願というのがグルントヴォレンというものならば、名言という言葉はグルントヴォルト (Grundwort [独]) ですね。根元語と言ったらいいですか、根元言ですね。根元の言です。名言にはそういうことがあるわけです。それで、自覚というものを、「知る」ということだけではなしに、「目覚めさす」、眠っておるもの呼び覚ますという意味でとらえる時、それは根元が、根元を失って眠っておる意識を、根元に呼び覚ますこういうことがある。そういうところに、根元の話しかけというものがあられるわけですね。根元の話しかけ。そういうことが考えられなければならない。そういうところから、やはり言葉という問題が出てくるわけです。根元が根元自身に呼び帰すはたらきですね。そういうものとして、自覚ということが成り立ってくる。ですから、言葉という問題は、願生道においては重要な位置を持つてくることになります。

もつと広く考えれば、人間というものは言葉を持ったものだというわけで、だいたい、言葉というものは人間の本質的規定ですわね。あるいは、人間は意識を持ったものだということも言える。だから仏教では「衆生」と言う。サットヴァ (sattva [梵]) ということを古い言葉では「衆生」と言ったり、新訳語、玄奘三蔵以降は「有情」です。「衆生」に対して「有情」。要するに、「情」と言うのだから、情知する。さっき言ったように、識は識だけど、智でない識。智にならない識は情知と言う。ですから、意識を持ったものという意味で、「衆生」という概念を見ているのが新訳の言葉です。推していけば、自分自身をして自分自身というものを意識して生きているのですね。そういう

ものを考えていけば、そこに人間というものがあるのではないかと思うのです。

無論、衆生は人間ではない。人間というのは衆生の一つの在り方ですよ。人間も衆生であるけれども、衆生というものの一つの場合が人間という場合だ。特に人間というところにある意味は、やはり外国でも「考える輩」というようなことを言うように、そこには何か意識を持って、自分自身を問題にしていくと、こういうようなことが、人間存在としての特有性ですね。今日の哲学で、よく存在了解と言います。存在了解を持っていると言う。人間という場合、人間は衆生の一つの場合です。人間という場合をまっぴら、はじめて衆生自身を自覚するのです。そういうところに人間というもの、の非常に重要な意義があるわけです。受け難くして受けたと言いますね。得難い機会を得たという、そういう意味が人間にはある。衆生全体を問題にすることのできる一つの境遇が与えられたことが人間です。そういう問題を押し切ってしまうえば、結局は自覚を持つということ、人間が自覚を考えるのではなくて、自覚を持つということに、人間が人間として成就してくるという意義がある。自覚のない人間というようになると、それは物存在ということになりますよね。それは衆生と異なる。物存在するのではない。物存在ということになると、実存することができない、覚存することができない。やはり人間というものは、自覚的存在ということに人間が人間となるという意義があるわけです。自覚ということは、そういう人間の本質的なことですから。根元的であり、また本質的です。

それと同等な意味を持っているのは、やはり言葉だろうと思うのですね。人間は語るものである。レーデン (Reden [独])、語るということがあるわけですね。これは何でしょう。人間が考えるものだとすることは、同時に語るものだといいことですが、それは人間にもいろんな能力があつて、その一つとして語るということがあるというのではなしに、本質的な規定ですよ。語るということが人間の在り方になるわけです。人間をして人間たらしめるというような意味がシユプレッヒエンというところにはあるわけです。それは人間の一つの存在の仕方でしょう。人

間は言葉を持った存在者であると、こういうことが言えると思うのです。人間というものは、「人<sup>にん</sup>」なのです。「人<sup>にん</sup>」は「間<sup>あひだ</sup>」という意味を表している。こういうところに、互いに語るものということがあるわけです。語ると言っても、一人で語る、独り言を言っているのではなしに、相対して語るという、つまり対話ですね。こういうような点で、言葉という問題が大事な問題になるわけです。

この前に、自覚とか意識という問題のところで、自覚は意識するのだけど、目覚めるといふのは眠るといふことがないというように話をしました。眠るような意識であるからして、また目覚めることもあるわけです。しかし、物というものは眠ることがない。だから目覚めるといふこともないのです。目覚めることができるのは、眠り得るからなのです。まあ、迷うということができるからして、悟るといふこともできる。迷うことのできないものは、悟ることもできない。何故かと言うと、「悟る」と言っても、迷ったことを悟るのですからね。迷った経験のない者に、悟るといふことはありやうがない。夢から覚めるといふことは、「夢だった」と知ることです。夢を見ているものの中に、夢の自覚はないですね。「信ずる」と言えば、疑うということがある。疑うことができるから信じるのです。疑いようのないものは、信ずるといふこともできない。こういうわけで、意識というものは、そのように眠ると共に目覚めるものであると、こういうことがある。

言葉もそれと同様だと思ふ。言葉もやはり、言葉によつて人間は迷うものではないかと思ふね。言葉によつて迷う。言葉というものは、ものの実相を変えて覆つてしまふ。そしてそれを誤解させる。そういう意味において、言葉というものによつて迷う。ものの本当の姿というものを覆うものもまた言葉というところにある。しかし、それ故にこそ、またその覆いをとるものも言葉です。ものの真偽を覆うものが言葉であるとともに、それ故にこそ、真偽を顕わにするものもまた言葉です。迷いを転ずる。迷うのも言葉によつて迷うのですけれども、その迷いを転ずるのもまた言葉。こういうことがある。ちょうど意識において、ただ意識するといふだけではなしに、目覚めるといふことが大

事だというように、言葉にもそういうことがある。

### 三

単に自分の思うことを語る、シユプレッヒエンというのはそうですが、そう言うと、それは思想伝達の道具でしょう。非常に有用な道具ですわね。これはあなたの方の方がよく知っているかもしれないけれども、ルネッサンスということを使う場合に、活字の発明ということがあると聞いています。活字。それは思想を運搬する道具でしょう。また、イギリスが長い間インドを支配していたというのも、インドには言葉がいろいろあるから、かえってそれによってインドの統一ができたという事を利用してということがある。ちょうど資本主義の先駆というのが、汽車とか汽船とか交通機関によってあるように、言語というものも、そういう意味においては思想伝達の道具でしょう。

人間と言えば、言葉を持ったものだとも言えるのですけれども、また道具を作るものが人間であると、こういうような考えが、特に人間学という意味では言われるのですね。道具を作る。ただ知ることではなしに、技術ということが出てくるわけです。自然科学によって自然を知ることではなしに、自然科学の知識を技術として、知ることを使っていくわけです。「知る」ということは、何かを知ることであるとともに、何かをもたらすという意味があるわけです。何かを知るということも、知ることの大事な要素ですけれども、知ったことをもたらす、何かをもたらすという問題がある。こういう具合に言うと、何ももたらすないのだったら、知らないまでと知ってからと区別ないわね。だから、何かをもたらすということから言えば、技術というものが出てくる。そういうわけで、ここに道具ということがある。その道具の中で、最も深い意味を持つものは、言葉ではないかと思うのです。

しかし今言ったように、自覚ということには、知るだけではなしに、目覚めるといふような意味があるのですから、

そうしてみれば、言葉もただ有用な道具というだけではなしに、道具以上の意味があるのです。道具以上の意味。それは大事なことです。単なる道具ではなしに、人間存在を一転させるような意味を持つのです。道具というものは、一番最後に壁に突き当たると。道具というものは、一つの単独の道具というものではない。道具というものには、いろいろな道具がある。これは何のためかというのと、これはまた何のためか、というふうには、道具は体系である。一つの道具というものはない。そして一番最後は壁に打ち当たると。それは言ってみたら、道具にならないものが壁に打ち当たると。それが人間の壁です。人間を道具にするわけにはいきません。道具にはいろいろあるけれども、最後に壁に突き当たると。どうしても道具にならないもの、それは人間でしょう。人間と人間とがあつて、言葉はある人間の思想を伝達するという道具であるけれども、しかしこの言葉というものは、それだけの意味ではない。人間そのものを成り立たせる。変革する。そうするとそれは道具ではないわね。人間そのものを成り立たせる。何かを得るのではない。自己を得る。自己の自覚を得せしめるものです。

そういうわけで言葉というものは、単なる道具という、一般的な意義以上の意義を持たなければならぬですわね。それは言葉に対する一つの尊厳です。ちょうど自覚ということが、単に知るということではなしに、エヴァアツヒエンというような、目覚めるといふことがなければ自覚の内容がないのと同じように、言葉も単に伝達の道具という以上の意義がなければならぬ。信仰の自覚は、ただ知るといふことではない。目覚めるといふ意味がなければ、信仰の自覚にはならない。したがって信仰といふ自覚を成り立たせるような意味での言葉は、単なる道具ではない。言葉には道具以上の意義といふものがなければならぬ。そういうものを考えてこないと、みなさんが知っておられる名号といふような意義も出てこないですよ。これは大事な点ですわね。

仏教と言っても、実存的な意義といふものを大事にするという点では、今日では禅と念仏といふものだろうと私は思うのです。この学校の鈴木大拙師など、むしろ日本の仏教といふのは禅といふものを通して外国に理解されてい

る。禪という言葉がもう日本語ですよ。ゼン、ブディズム (Zen Buddhism [英]) と行って、ディヤーナ、ブディズム (Dhyana Buddhism) と言わない。禪とゾウのは、元の言葉はディヤーナ (dhyana [梵]) ですが、それをゼンブディズムと言う。Zen というのは発音が日本語でしょう。ああいう言葉も非常に大事です。禪というのでも考えてみなければならぬですけども、親鸞教学というものは、願生の教学というものは、禪の教学というものに対してどういう点が違うかと言うと、一番大事な点は言葉の教学ですよ。これは非常に大事なことですよ。禪の特色というものは、無の教学ですわね。無言の教学。願生の教学は有言の教学です。これは非常に大事な特色です。ところが、その言葉というものが、なかなか面倒なのです。言葉というものが面倒だからして、南無阿彌陀仏という仏の「名前」を、ただネーム (name [英]) と言ってみたところでわからない。誤解されるだけです。本当の深い精神というものを伝えるということがなかなか難しい。伝えなくても、わかっているようにいいたいというようなものでも、伝えることのできないものは、またわからないものです。そういうことになるのですけれどもね。ただ漠然と、気分としてわかっていると言うだけなら、それは勘みたくないものです。それではどうも学問というものにならないのではないかね。学問というのは、一人芸ではないのが学問です。一人芸、名人芸ではないのが学問です。みんなが行ける道を万人に公開するという意味が、「学」という意味ですからね。念仏は、もちろん学を超えているものではないでしょう。学から出たものではない。学以前に根拠を持っているものだけれども、しかし、真宗学と言うように、仏教学と言うように、学という形をとらなければ、知っている人は知っている、知らない人は知らないという、もうそれだけの話に終わってしまふ。それは名人芸ということになりましょう。ですから、学という限り、普遍性とか、妥当性というところがないと、公の道、公開の道にならないでしょう。そのためにやはり、名というようなものも、厳密な概念規定というものを必要とするのではないかと思います。厳密に、しかも根元的に、その意義を明らかにすることが大事だと思います。

とりあえず、「語る」ということは、人間というものの能力の一つではない。それは人間の固有の在り方になるわけです。言葉によって、言葉を持つている。言葉を持ったものということが、人間が人間でないものから区別される。そういうような意義がある。言葉は、一応はどこまでも人間の言葉です。しかし、自覚というものが、ただ「知る」というだけではなしに、アウエイク (awake [英]) というような意義を持つように、そこには人間というものものの根元の話しかけというものがあるわけでしょう。何と云うかね、根元のシユプレッヒエン。話しかけということがあるでしょう。話しかける。人間の根元が人間に、自己の根元が根元を失った自己に話しかける。こういう、根元による話しかけということが予想されている。自己の根元。我々は、それに対して応えるわけです。応答する。アントヴォルト (Antwort [独]) ということもある。返信、返事ということもあるけれども、応答ですね。言葉というものは、根元の呼びかけということがある。言葉は人間であるようだけれども、そうではなくて、人間の根元が人間に呼びかける。むしろ人間は、それに応答するのです。根元よりの呼びかけに対して、話しかけに対して、我々は応答していく。人間は応答する。そういう言葉ですね。言葉は根元からの話しかけであり、むしろ人間はそれに対する応答ですね。そういうものとして、さつき言ったような目覚めということが成り立つ。目覚めとしての自覚が成り立つ。一応は、言葉は人間をして人間たらしめるといふ意義がある。言葉には人間そのものというような意義があつたけれども、しかし今言ったように、言葉というものが、ただ便利なものにしかならないのかというと、そうではない。言葉とは、人間の言葉であるよりも、むしろ根元の言葉ですね。自己の根元が自己に対する言葉。言葉とは人間の持つものではなしに、むしろ人間に呼びかけるものである。そういうところに言葉の大切な意義がある。言葉というものは、人間の言葉であるよりも、本来は実在の言葉でしょう。実在の言葉。こういうような意味が出てくる。

さつき言っていたことですが、「人間」というものは、そこに「間」と言うね。人間というのは、衆生というものの一つの場合ですが、「人間」というのは、「間」を持ったところに「人」というものがあるわけです。「間」。これは何と言いますか、ビトウィーン (between [英]) と言いますかね、そういうことがある。プーバーにビトウィーン マン アンド マン (Between Man and Man [英]) という言葉があるが、そういう義。やはり、義と言ったほうがいいね。人間というものは、「間」というところに、人間の社会というものの基礎があるので、人間というものは、一人の人では成り立たない。人は人に対して人である。物に対するばかりではなく、人に対する。物との「間」、人との「間」。そういうようなわけで、一人の人ということから考えれば人は成り立たない。そういうところから、人には「人間」というふうに、「間」という字が付けられる。ビトウィーン マン アンド マン という言葉は、非常に有名なプーバーの言葉ですけども、「間」ということを非常に注意した思想ですね。

人間は、そういう「間」というところから、言葉ということにおいて、シユプレツヒェンということ、話すということが出てくる。対話ということが出てくるんですね。ただただ、単に話をしているというのではなしに、その「間」において、絶えず人と人と応対して話すということがある。やはり、対話ということが本にあるわけですわね。人間というのは対話的な存在である。ただ一人で話しているのではなく、対話です。対話的存在であるということが大切だね。けれども、さつき言ったように、対話と申しても、人と人が対話するわけだね。そうでしょう。人と人が対話する。今言う信仰なんかの場合、そちらの問題を明らかにする場合は、人と人が対話するという意味が、一般に考える対話です。しかし、今言う自覚とか、目覚めるということにおいて「語る」と言うことは、根元が我々に語る。実在が我々に語る。そういうことから言えば、対話は人と人との対話ではない。実在と人との対話です。自己の根元と自己との対話ですね。そうでしょう。人と人との対話ではない。人そのものの構造としての対話ですね。ある者とある者との対話ではないのであって、ある者自身を成り立たせる対話。それは人と人との対話ではないでし

よう。人の根元が人に対する対話です。

つまり対話と言っても、これは同じ水平における関係のものではない。同じ水平において対話が行われているのではない。水平というものを根底から破ったものです。人と人とが対話する、AとBとが対話するというのは、水平というものにおいて対話がある。そういうような意味ではなしに、むしろ水平を破る。つまり深み、水平というものを破った深みですね。デプス (depth) (英) ということ、そういう深淵と言いますか、深い淵から人間というものに呼びかける一つの対話ですわね。こういう具合に考えなければならぬ。今言った深みからの対話というのは、人間と深みとが水平においてあるのではない。人間と深みとが水平において、同格で対話するわけではない。しかも、人間が実在に呼びかけるのではなく、人間に先立って、実在が人間の方に呼びかけてくるわけですね。人間の方が実在に呼びかけるのではなく、むしろ実在そのものが人間に呼びかけてくる。主導権は根元にあるわけですね。対話の主導権、対話の主語は、いつでも実在である。実在が主導権を持っている。むしろ人間の方が「汝」です。実在の方が「我」です。こういうように、主導権というものは根元にある。人間はそれに対する応答ということになるわけです。そういうことは、だんだんお話ししていきたいと思いますが、言葉というものは、ただ理性で聞くのではない。言葉というものも理性ということと離れたものではないし、理性を持ったものは言葉を持ったものだということのように、広く言えばそういうように考えられているわけですけども、今言っている「言葉を聞く」というのは、理性よりもっと深い根元から出た言葉ですから、聞く方もそれを理性で受け止めて聞くのではない。「なるほど、うまいこと言っている」とか、自分に合わせて聞くのではない。そうではなくて、理性を破って聞かなければならない。理性よりも深い根元から呼びかけてくる声、理性を超えた深みから理性を超えて我々に話しかけてくる。それを我々が理性で受け止めるということとはできない。理性よりもっと深いところから応答しなければならぬ。ですから、「聞く」というようなことも、これから考えていかなければなりませんけれども、「名を聞く」という場合、その「聞く」というこ

とがどういふことなのかが大事です。やはり、「聞く」とか、「見る」といふことが問題になってくるのです。「聞く」と言つても、いろいろな聞き方あるわね。参考のためにちよつと聞いてみるということもあるしね。参考のために聞くとか、教養のために聞くとか、学校の学生が講義を聞くのはどんなものか知らないけれども、試験を通過するために聞くとか、いろんな聞き方があるね。そうでなしにね、全責任をもつて「聞く」。耳で聞くのではない。耳で聞くのではなくて、人間の存在全体が耳となると、こういうような意味の聞き方です。全責任をもつてそれに応答する。根元の呼びかけ、話しかけというのは、こういうような聞き方を要求しているわけです。

## 五

これはまあ、何と言うか、面倒な話でね、言葉は人間の言葉であるというよりも、實在の言葉だと、こういうことを今言いましたけれども、しかし實在そのものは実は言葉が無いものと言つた方がいいかもしれない。仏教の言葉で言うとは離言です。離言の法性、法性法身ということがあります。離言の法性ということを使う場合、言葉というものは法性を覆ひ、間違わせるものということになるね。言葉というものは、ある意味から言うと、非常に有効なものだとも言えるけれども、かえつて非常に危険なものだとも言える。我々を迷わせるという意味がある。ものを覆うてしまふ。法性を覆うてしまふという意味がある。しかしそれ故にこそ、法性は顕すものである。言葉は法性を覆うていふ、そういう危険性の面から、仏教では離言と、こう言う。實在は離言であると、こういうことが一応今言えましよう。ですから根元の我々に対する話しかけというものは、離言の言です。離言の言というのは、声のない声ですね。声のない声というもの。離言の言に声なき声という意味があるわけでしょう。したがつて、「人間」と言うところは、声なき声を聞くというような意味があるわけです。

どう言ったらいいか、実在には言葉はない。しかし、その言葉のない実在が語りかける。語りかけるものは「言」というものでなければならぬ。しかし、もう一つは、その場合の「言」とは、人間の言葉であると言うよりも、実在の言葉ですから、実在の語りかけ、実在が人間に語りかけたという言葉は、その語りかけを聞いた人間が応えて言うのではないかと思うのですね。つまり語りかけられた人間が、語りかけたものを言い表す。そうでないと離言の言というものは成り立たない。ただ離言と言うだけでなく、離言の言と言うのですから、離言の言を聞いた人間が、聞いた立場から離言に「言」ということを表してくるのですね。そういうことがあるのではないかね。

やはり真理というものは目覚めた意識にあるのではないか。目覚めようが目覚めまいが、どちらにも関わらず、変わらないものが真理かもしれないけれども、真理があるという場合は、そういう真理が、目覚めるとか目覚めないということを超えて現れる。そういう意味では、先験的、超越的です。根元的なものもまた、一つの超越的な意味、トランセンデンタル (transzendental)〔独〕という意味を持つのでしょうか。しかし、そういうことを言えるのも、信心に目覚めたからだと思う。信心というものは、目覚めた人にあるだけではなく、目覚めない者であるにもかかわらずあると言うことも、目覚めていなければ言えないのではないか。そうでしょう。離言の言ということは、もちろん人間の言葉ではない。実在の言葉だけれども、しかし、言葉のない実在が語りかける。離言が言としてあると言うためには、実在の言というものを聞いた人間を通して言うわけです。だから実在は、ただ実在にとどまらない。それは人間に語りかける実在、語る実在となるわけでしょう。語る実在となる。実在が単なる実在にとどまらない。離言が単なる離言にとどまらない。それは人間にはたらしめかける実在となる。人間を通して実在は自己を具体化するわけです。人間というものによって実在は自己を具体化する。人間を超えた実在が人間によって自己を具体化してくる。どこまでも人間というものに超越的であるものが、しかも人間というかたちで自己を具体化したものが言葉ではないかと思えます。つまり表現的実在というわけでしょうか。実在が表現的となることによって、はじめて人間は実在を自

覚するのです。言葉というものは、そういうように、ただ便利なものだということだけではなしに、実在は人間を通して自己を具体化することによって、人間はその実在を自覚してくる。そういうはたらきを言葉というものは持っている。本当の意味の言葉というものは、そういうように離言の言、声なき声というようなものでしょうが、そういうことが第一義的な言葉です。言葉は人間にあるものだと言うけれども、しかし人間を超えて人間を目標とするという意味から言えば、人間を超えたものを人間によって具体化するという意味が言葉にはある。実在は言葉を超えているものだけでも、人間の言葉によって実在は顕わになる。人間の言葉があるけれども、それは人間になった実在だ。実在が人間の言葉を借りて自己を表現したという意味での言葉ですわね。

そういう意味で、経というものは、経言というものは、みんなそうやってできているのではないかと私は思うのです。経というものは、つまり人間と人間との対話ではない。経、スートラ (sūtra) (梵) について、世親、無着が「浄法界等流」ということを言う。こういう言葉で経というものが表されている。これは今言った問題を考えるのに非常に都合がいい。「浄法界等流」。浄法界、清浄法界というものは、これは離言です。経は離言の言である。離言の言説です。経というものには、離言の言としての意味がある。離言の世界を法界と言う。これを実在と言う。それが言説となるという場合には、これは全く言葉を離れたものが言葉となるのですから、さつき言ったように、言葉というものは誤解させるものだという一面もありますけれども、同時に、言うことができなものが言われたのですから、その時、全く変わったものになるわけです。離言が言となるのですから、正反対になるわけです。全く言葉を離れたものが言葉となるのですから、ある意味から矛盾したと言いますか、声なき声、離言の言というのは、矛盾概念、絶対矛盾を表している。そういうような意味で、離言が言になれば全く変化してきますから、こういうようになれば、それは異熟してしまっただけと言えそうです。離言の法界が言となれば、法界が異熟したということになる。言葉を超えたものが言葉になるのですから、全く変わってしまう。変化してしまっただけ。こういう場合は、言葉は実在を変えて、実在

を裂いてしまうということになる。こういう場合は異熟ですね。言葉が法界を法界ではないものにしてしまうという意味で異熟。

と同時にまた、そういうものであればこそ、また法界は法界というものを顕わにする。離言と言っても、それは何も無いという意味ではない。ただニヒト (nicht (独)) というのではないでしょう。何にも無いものではない。むしろ、あるもの以上でしょう。何にも無いのではなく、そのものこそ、あるものをしてあらしめている。ですから、単なるニヒトではない。いわゆるニヒリズム (Nihilismus (独)) の nicht ではない。ニヒリズムというものが考える単なるニヒトではない。かえってそれは無を活かすところの無である。そういう意味がなければならぬ。そういう意味が表されなければならぬわけです。法界は言葉では言えないものであるけれども、ただそれだけではない。それであればこそかえって、言えない意味を持っている。無意味なものではない。ただ単にニヒトというのは無意味ですわね。無意味とか、不条理ということになるでしょう。そうではなくて、離言というのは、あらゆる意味以上の意味を持っている。本当の意味、そういう意味を表さなければならぬでしょう。やっぱりその時には言葉によるしか仕方がない。離言ということは、ただ無意味な無ではない。むしろ本当の意味の無である。こういうような意味においては、離言というのは、いろんな意味を超えた意味ですね。「便利な意味で」と、そういう意味ではないんだ。それを失えば人間は無くなるという意味。それを得れば人間は自己を回復するという意味。何ものを失ってもそれで十分であるという意味が、そこにはあるはずだ。しかしそれを失うなら何を得ても無意味だと。幸福だとか、健康だとか、便利だとか、いろんなことを言っているけれども、それらにいったい何の意味があるのかと言った場合、結局、無意味になってしまいませんか。そういう無意味の意識がいわゆるニヒリズムですわね。現代というものは、資本主義社会というものは、ある意味から言うと、ニヒリズムという無意味が、全面に現れている時代ですね。しかし、ただ無意味なのではない。私たちが思うような、あらゆる意味ではない、本当の意味が、そこにはあるわけです。そう

いうものは、やはり言葉で表すより仕方ない。だからして、法界は覆われるものではなしに、かえって法界を顕わにする。こういう場合は、それを「等流」と言うわけです。法界を異熟せしめるものも言葉であるけれども、また法界の意味を顕わにするものも言葉である。それを「浄法界等流」と言う。法界の等流。離言が離言でなくなつて言となるのではない。離言が言となるということは、言のままがやはり離言だということです。言のままが離言である。離言が言となることによつて、離言を顕わにする。こういうような意味で、経説というものがある。そういうものが経です。経というのはいつの言説です。言説された法界というわけです。言説された実在という意味がある。今日はそこまでにしときましましょうか。

（本稿は、一九六三年十月十九日の大谷大学における講義「願生論」を筆録整理したものである。文責編集部）